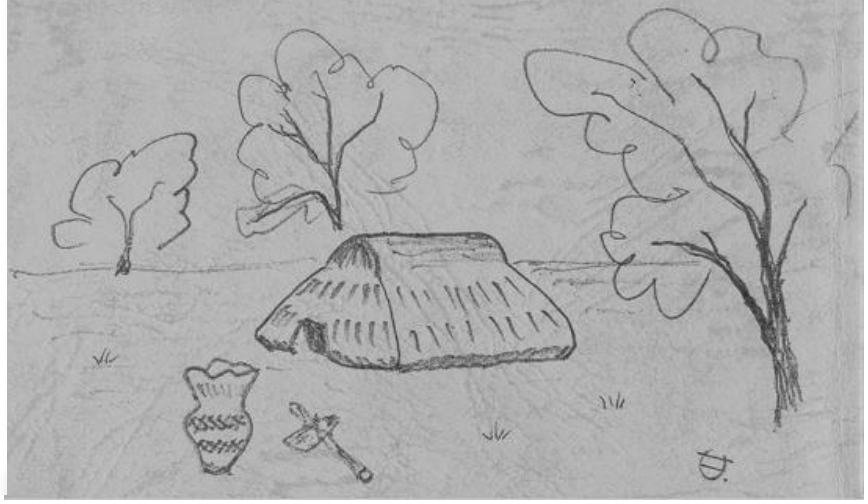
”富士見市の昔話・その五”

『犬と縄文兄妹』

甘十楽



”富士見市の昔話・その五“

『犬と縄文兄妹』

甘十楽

昔も昔、今から六千年程も昔、このあたりは、豊かな森と、煌めく泉とせせらぎと、そうそうもう一ッ、恵みの海までもが、そこまで来ている、自然に満ちたところでした。

そんな頃にあったらしいお話しです。

どうしたわけか、生まれて間もないのではと見える仔犬が、親をさがして疲れはて、お腹をすかせてよろよろと、草をかき分けながらようやく、キラキラと流れるせせらぎにたどり着きました。

クーンと低く鳴くと両足を広げて頭を下げ、小さな舌を出して水をなめ始めました。喉が潤って一息つくと、なんだかお乳の匂いがするような気がして、あたりを見廻しました。すると六メートル程上流に先客があって、同じように水を舐めています。よく見ると同じ位の大きさのシマ模様が特徴のウリ坊、そう、猪の赤ちゃんが二匹、お母さんに連れられて来ていたのです。

同じ位の大きさなので親し

みを感じて、クーン（コンニチワ）と声を掛けました。ウリ坊の内の一匹が、ビクッと驚いた拍子に、前につんのめり、チャポンと顔から水に落ちてしまいました。母猪は少し離れた高い所で反対側を監視しているので気がつきません。仔犬はワンワンッ（おばさん大変ッ）と吠えて教えました。振り返った母猪が「あらまあ」と言ってとんで来て、水に入り、鼻先で押してウリ坊を岸に登らせました。「どこの仔か知らないけど、教えてくれてありがとうね」とお礼を言ってくれました。

そして安心したのか、

「少しいっしょに遊んだら」といって三匹で遊ばせてくれました。

「さあ、お腹がすいたんじゃない、オッパイにしなさい」と言って横になってウリ坊達に飲ませ始めました。二匹ではあまってしまうオッパイからも、少しお乳がしたたっています。

さっきお乳の匂いを感じたのはこれだったのでは、と仔犬は思いました。お腹がすききっているので、うらやましくて、ついお腹がグーッと鳴ってしまいました。それを耳にした母猪が

「あら、あなたもお腹がすいてるのね、良かったらいっしょに飲んでみる」と言ってくれました。

「うれしいッ」と、ウリ坊達の邪魔にならないように、しゃぶらせてもらいました。

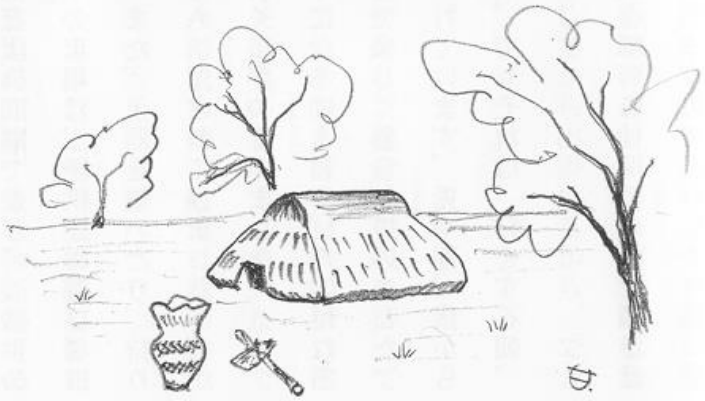
「あまーい、おいしーい、いいにおい」と段々ゴクゴクと飲ませてもらっている内に、お腹もいっぱいになって、気持ち良くなってしまい、ウリ坊達と重なるように寝てしまいました。「疲れていたのね、可哀想に」と母猪は、やさしくそのまま見守ってくれました。

こうして、いっしょに育ててもらうようになり、土の中を鼻先で掘

って、虫の幼虫や、ミミズ、草の根を採ったり、ネズミやもぐら等をつかまえる狩りの仕方まで教わり、ウリ坊と同じように生活の術を学んで行くのでした。

一方、そんな森からそれ程遠くない、台地にある林の中に、平らな草地の広がりがあり、その場を利用したこの辺りではめずらしい、人の集落がありました。

二百メートル四方程もある草地の広



場を囲むように、九戸の茅葺き小屋がほどよい間隔で並び、（後世の人が〝環状集落〟と呼ぶように）、真中の広場は、子供達の遊び場はもとより、人々の会合にも、祭りにも、また、土器を焼いたり、狩りの得物を捌いたりする共同作業場としても活用されていました。だから程よく踏まれて、芝地のように心地よく広がっていました。

そこの北の方のひとつの小屋に、九才になる縄太君と、六才になる妹の文奈ちゃんが、お父とお母と祖母とで楽しく暮らしていました。

お父は、集落の中でも狩の名人と云われています。兎や狸、猪から鹿まで狙ったものは外さないからでした。でもそれは、狩をする朝、お父は必ずお天道様に手を合せ

「今日は、お天道様の下でいっしょに生きている仲間の命を、預かせてもらいます。必ず必要な分だけに止どめますのでお許し下さい。子

育て中のものは決して狙いません」と云ってお祈りを済ませ、裏の林に入ってつるした草の束をめがけて弓矢の練習をし、傷つけて苦しめることのないよう、急所を射るけいこをしてから出掛けるから、できるのでした。

そんなお父が、日ざしが暑くなった朝、

「縄太よ、お前ももうすぐ十才になるんだから、自分の弓矢を持ってみような」と云っていっしょに山に入って竹やつる等の材料の切り出しから教えてくれました。狩の名人は弓矢造りの名人でもあったのです。身体に合うように造れば身体に馴染んで使い勝手も良くなるのです。そして造りながら

「狩りの日は、少し風があって木の葉がサワサワと鳴ってくれている日の方が、矢羽の音を消してくれるので良いんだよ、生き物達は、そ

りゃあ音に敏感で、普段聞き慣れない矢羽が風を切る音にも、すぐに身を翻してしまうからな」等とも話してくれました。

縄太もなんだか大人の仲間入りが出来るのかな、とうれしくなり、作る手にも気合が入るのでした。

「文奈や、今日は潮の具合も良いので、いっしょに貝取りに連れて行こうかね」と祖母が云ってくれ、お母も笑顔で頷いているので「うわーッうれしい、じゃあ袋はあたしが持つわね」と云って、お母が編んだ麻の袋を受け取ると、文奈は先に歩き始めました。

百メートル程北に行くと急坂になっていて、そこを下るともう砂浜になっています。そうですその先はもう海になっているのです。（後世の人は、これを縄文海進、と呼び、富士見市商工会ではこれに因んで"縄文海進"という銘柄のお酒まで造り販売する事があります。）

潮のひいた砂浜を、ひたひたと足の裏が丁度浸る位までのところへ来ると、祖母が

「このあたりでいいかね」といって竹で作った櫛のような物で堀り始め、文奈もお母のやり方をまねてみると、

「うわーッ私にもさがせたあ」櫛でかいた下に、アサリがいました。

夢中になって続けていたら、ハマグリや、赤貝まで採れました。

祖母が、

「運の良い時はカキまで採れる事があるんだよ。でもね文奈、欲張ってはいけないのよ。これもお天道様のお恵みなんだからね。今日食べるのに必要な分だけでいいのよ。何時だって海に蓄えて置いてくれるんだからね。さあ母さんや、今日はこれくらいにしようかね」といい、

お母も

「そうですね、じゃあ最後に、流れついている海草を拾っていって塩味にしましょう。」と云って、袋をひとつづつぶらさげて終らせ、

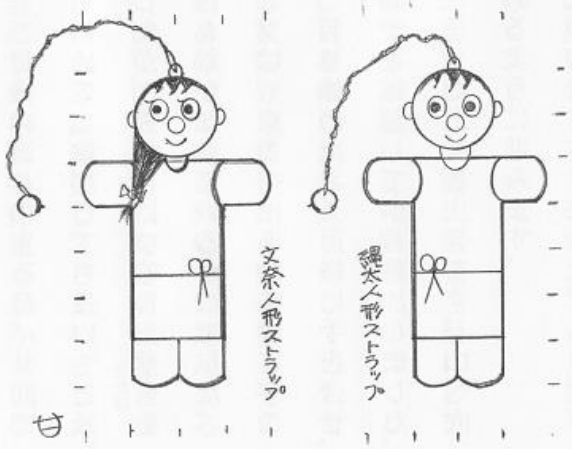
「ねえ、祖母ってすごいでしょ。何でも知っているのよ。山に入れば、栗の実、ぐみ、クルミ、柿、季節によっては、ワラビ、ゼンマイから野イチゴまで、ある場所を知っていて、お母に教えてくれたのよ」とお母が帰りの道すがら話してくれました。

お母のお料理はおいしいから、何でも残さず喰べますが、貝殻(かいがら)だけは残ってしまいます。幸い集落の内の一軒が、小屋が古くなり立て替える必要があり、古い方に住みながら隣に建てる事になりました。集落のみんなで材木の組み上げ、屋根の藁葺きまで手伝います。小屋は、夏涼しく、冬暖(あたた)かなように、土を八十センチ程、堀り下げてあります

（後世の人はこれを竪穴(たてあな)住居と呼びます）。だから新居に引越した後に穴だけが残ります。そこが手伝った人みんなの貝殻等の捨て場所になったのです（その後、何代かを経て捨て場所の数も増え、さらに後世の人が土の中から堀り出して〝貝塚〟と呼ぶ事になります）。

「貝殻は僕が捨ててくるよ」と縄太が云えば

「私もドングリの皮を捨ててくる」と云って軽めのゴミを持って文奈がついて行きます。よくお手伝いもする仲の良い兄妹です。



そしてある日、集落の会議があって、三日後の満月の来る日、共同で狩りをする事が決まりました。縄太も初めて「参加しても良い」と云われました。十才になったばかりでしたが、裏の林につるした草束を的に、弓の練習に励んでいるのを、皆んなが知っているからでした。

その日がやって来ました。縄太とお父は、東の空にあか味がさすころには起きて、泉に下りて身を清め、昇り始めたお天道様に手を合せ、いつものように練習をして、弓矢の調子を確認してから参加しました。

長老が木の板を、カンカン、カンと三ッたたくと出発です。山へ向って少しづつ間隔を置いて、追い詰めるように進みます。

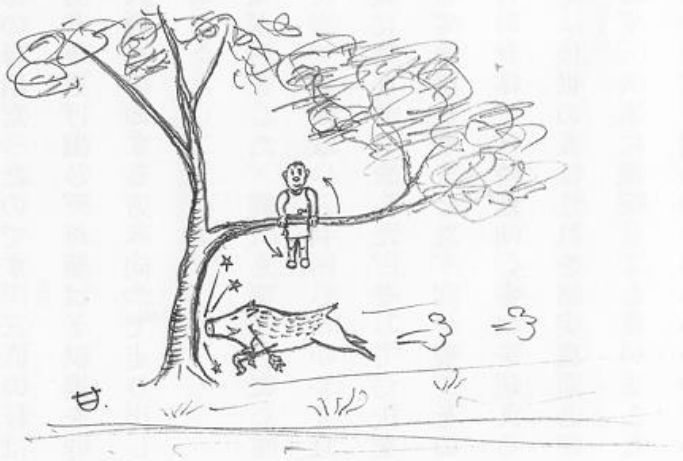
ブスッとにぶい音がして猪の首に矢がつきささりました。

「ブヒィーッ、お前達は母さんにかまわず、山の奥へ逃げるのよ。母さんは走って狩に来た人の目を引きつけるからねッ」と叫んだのは、

あの母猪です。矢がささったのはあの母猪だったのです。三匹の仔は、母の権幕に驚いて、一目散に山の方へと逃げ出し、母猪は子供達を守ろうと、必死の思いで、狩に来た人の臭いのする方へ向って走り出しました。

運悪くその突進して来る先に縄太が居ました。縄太も猪を目にして、へたに逃げてうしろを見せてはかえってあぶないと判断し、ゆっくり太めの木を背にすると、目の上の枝に目をやりました。そして弓矢を手放すと同時に飛びつき、逆上りして枝に登りました。間一髪、その足をかすめるように、母猪は百キロの身体で、時速四〇キロを超えるような勢いで突進して来ていたので（後世の人はこれを猪突猛進と呼びますが）とっさにかわす事ができず、大木に激突してしまいました。首にささった矢からも血の出ている身です。自らの体重もかかってい

たのでたまりません。ドウッと
その場に倒れると、足をびくび
くッとさせましたが、その後は
動かなくなってしまいました。
「どうかしたのか、大丈夫かあ
？」とお父が少し離れた笹の中
から、木の枝に登っている縄太
を見て声をかけてくれ、近寄っ
て来てくれました。そして
「あー、この矢羽の印は、隣り
小屋のお父のものだ」と猪の首
を見てすぐに見分けました。



すると林の奥から仔犬が
「ワンワンッ」と鳴きながら駆けて来て、猪にささった矢に噛みつき、
引き抜こうとします。抜けません、もう一度「ワンワンッ」と鳴き今
度は、猪のとじた目をなめ始めました。まるで「目を開けて」と祈る
ような仕草です。ウリ坊達は山へ逃げましたが、仔犬は心配になって
引き返して来たのです。
するともう一匹、「ウオン、ウオンッ」と吠えながら、藪の中から
犬が出て来ました。得物を追いかけて来たお隣りのクロです。クロが、
「これは家のお父の得物だ」と云うように近づくと、仔犬は振り返っ
て、キッと睨みました。その気迫に、クロは一歩後ずさる程でした。
隣りのお父も追いついて来て、縄太のお父からこれまでの様子を聞
くと
「えッそれじゃあ、この仔犬にゆかりのある猪かも知れないね。もし

かすると育ててもらっていたのかな、仔犬やすまなかったね、草の中で背中しか見えずに射かけてしまったんだ許しておくれ。そのかわり、この命は集落の皆んなで、大切に使わせてもらうからね」と謝りました。縄太のお父も

「皆んなの責任なんだよ。許しておくれ」ととりなし、縄太もようやく木から降りて、猪の身体をさすり、仔犬の前足を両手で支えて「ごめんね」と云いました。

重い雰囲気になったので縄太達は今日の猟を終らせ、隣りのお父と縄太のお父が、二人掛りで棒に通した猪をかついで引き上げます。

「大切にするのを見届けにおいで」と縄太はそのまま仔犬を抱えて帰るのでした。

他の得物も含めて、満月にお供えした後、皆で分配して共同の狩は終りました。縄太のお父は、お願いしてその猪の頭を配けてもらい、

裏の林の一角に穴を堀り、手厚く葬り土を盛って、猪の鼻のような形のお墓にしてくれました。もちろん、縄太と仔犬も手伝い、それに妹の文奈まで出て来て、お花を摘んで供えました。

仔犬も、どうやらお父や縄太の気持ちが分ったように落ち着きを見せ、尻尾を振ったりするようになりました。

「さあ、こっちへいらっしゃい」文奈は、そんな仔犬を可哀想に思い、手をさしのべていたわるのでした。「妹か弟がほしいな」といったこともある文奈にとっては、ほんとうにうれしいめぐり会いで、それからは、寝る時もいっしょで、文奈と縄太の間に仔犬がはさまって眠るようになり、文奈は「コロコロしてるから〝コロ〟って呼ぶわね」と名前まで付けてくれました。

それから一年程経って、犬も青年犬になり縄太と共に、野や山や海

を走り廻り、口にくわえて物を運んだりするお手伝いも出来る程に、逞しく成長していました。

「お兄ちゃん、今日は海も荒れていて貝を採る事も出来ないから、犬におそわってスズナ（カブ）か、スズシロ（大根）を採りに行こうかしら」文奈が云いました。そうです犬は母猪から生きる術を教わった時、鼻先で土を堀って、虫等をつかまえるだけでなく、喰べられる草の根も教わっていたのです。そんな中に人にもおいしいものがあったのです。そしてそれがありそうなところも、犬には分かるようになっていたのです。猟や兎の狩りの先導に活躍するようになったばかりでなく、縄太一家にとって、重要な働き手、稼ぎ手になっていたのです。

縄太は十一才、文奈も八才になっていましたので、

「ようし、それじゃ今日は、もう少し山の奥まで行って見るか。いいかいコロ？」と犬に聞いてくれました。犬は尻尾を大きく振って前足

をピョンピョン上げてうれしさを表しました。

小さな山を越えると野原が広がっていました。スズナやスズシロは、お天道様が良く当る原っぱの方にあることが多いのです。

犬が嗅ぎつけると縄太が、竹で作って来たへらのような道具で堀り出し、文奈が土を払って持って来た麻袋に納めます。いくつか採れて喜んでいる時、犬の様子が急に変りました。遠くで「ウーッ」と唸る声を耳にしたのです。

その場に危険を感じる緊張が走りました。でも犬は次に鼻を持ち上げてヒクヒクさせ、臭いを確かめようとしています。そして少し緊張をほぐしたような様子になり、林が始まるあたりに歩いて行きました。そこにこっちを見て威嚇の形をしている、一匹の猪がいました。すっかり青年になって大人の毛並に変っていましたが、犬が嗅いでそうではないかと思ったとおり、一緒に育ててもらったウリ坊の内の一匹だ

ったのです。

犬（コロ）は再開を喜んで、身体をすり合い、なめ合い、聞いてみると「母を奪い、兄弟を分散させてしまった人間」に対しては、敵意どころか復讐心さえ持っているようでした。

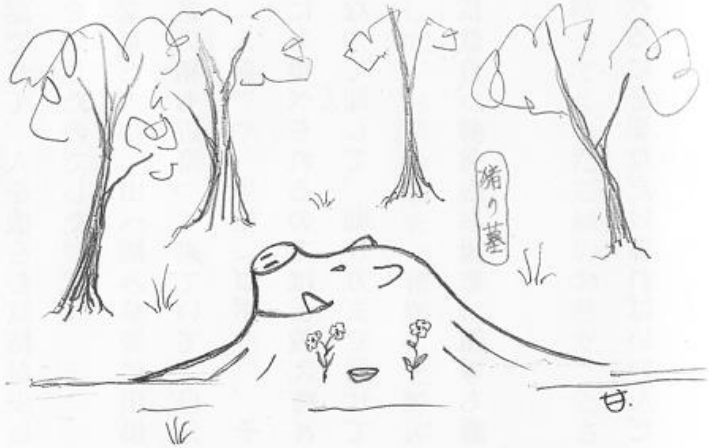
そこで犬（コロ）は、あの日の経緯（いきさつ）から、お墓を作って、毎日供養してくれている事まで、細かに話しましたが、いっぺんに打ち解けるわけもありませんでした。そこで犬（コロ）は

「また、ゆっくり会って話しをしよう」と云う事にして、その日は分かれて引き上げることにしました。だからその日の収穫は多くはありませんでした。

夜、縄太の寝息と文奈の寝息の真中に居た犬（コロ）ですが、かすかな動物の足音を感じて目を覚ましました。そうッと小屋の入口に近づき外に目をこらすと、真暗な中に、小さな二ッの光った目が近づいて来ます。

臭（にお）いで分かりましたが、あの猪です。「そうか」と思った犬（コロ）は、そうッと外に出ると「こっち、こっち」と前に立って、お墓のある方へ案内しました。

そこには、母の顔に似たように土が盛られた墓に、花も植えられ、大きなハマグリの殻（から）に入れた水まで供えられていました。猪は自然に涙が溢れて来て、土に鼻をつけてなつかしい母の臭いをいっぱい吸い込みました。



犬の話しがうそではなかった事が確認できて、人を恨らむ気持が少し溶けて行き、なぜか、心地良い気分を感じたのでした。

そんな事があってからは、縄太と文奈と犬が、山へ摘み草等に出掛けると、いつの間にか犬のうしろにあの猪も近寄って来ていて、自分で磨いた鼻技でさがし当てた、赤根（人参）や、黒根（ゴボウ）、それに山芋、またある時は筍まで、人にも喰べられるのではと教えてくれ、ありそうなところをいっしょになって探して、堀り方まで見せてくれるようになりました。

お蔭で縄太一家の食生活は、豊かになり、お父もお母も、祖母も喜んでくれました。

その時も祖母は

「欲張ってはなんないのよ、今日食べるに必要なだけ採ればいいんだよ。お天道様の恵みは、生き物皆んなで仲良く配けていただくんだからね。そうしておけば、また種が落ちて来年も、頂けるんだからね」

と話してくれるのでした。

豊かになったのも、「母猪が取り持ってくれたご縁のお蔭だ」とさらにお墓を大切にするのでした。

そして何時しか、集落の人達もそんな食べ物を知るようになり、猪のお墓をお詣りする人も出て来たりして、お墓の事を”猪塚“と呼ぶようにもなっていったそうです。

終り

昔話　「犬と縄文兄妹」

発　　行　2010年6月1日
著　　者　甘　十楽（あまみ　じゅうらく）
印刷・製本　志賀堂印刷

※筆者の甘 十楽氏の了承を得て
　同冊子をコピーして開示しております。